

Passport

2025 春 Vol.53

男らしさ、女らしさにとらわれず、自分らしく暮らせる社会。お互いに認め合い、個性と能力を発揮できる佐賀市の実現をめざしましょう。



・ CONTENTS ・

- 佐賀市女性活躍推進セミナー P1～P2
- 佐賀市男女共同参画推進協賛事業所紹介 P6
- 日常生活で感じるもやもやについてのプチ講義 P3～P4
- 女性に対する暴力をなくす運動 P7
- 父と子で一緒に楽しむ料理教室 P5

探せ! 私の自分らしさ!

開催日 令和6年11月24日(日)

会場 Lampada

トークセッション

3人のパネリストがそれぞれ、「キャリアの始まり」「仕事の中での辛さの乗り越え方」「絶対にゆずれないこと」「今のワークバランス」や「将来の夢」などについて語られました。それぞれの実体験に基づいた三者三様のお話にて、参加者は話に引き込まれていました。

参加者からの「前向きでキラキラの秘訣は何ですか。」との質問には「人生は一度限り。可能性は無限大」・「やまない雨はない」・「自分自身が納得できる生き方を!」との回答が返ってきて、会場みんなが元気をもらえたようでした。

パネリスト

音成亜美さん : 旅館あけぼの取締役

大島清美さん : 特定非営利活動法人鳳雛塾 キャリア教育コーディネーター

寺野幸子さん : NPO法人poco a bocca理事長

ファシリテーター

井本彩奈さん : 佐賀大学学生団体「TSUDOIBA」

ワークショップ 「考えよう 私のこれから」

ワークショップでは参加者が4つのグループに分かれてキャリア設計書を作成し、未来のライフ・キャリア・プランを考えました。3人のパネリストも各グループに加わって、「これまでの自分」「今の自分」「これからの自分」について考えたことを共有しました。どのグループも和気あいあいとした雰囲気の中で交流が行われていました。10年後の自分へのメッセージを書いてワークショップは終了しました。



【感想】

トークセッションでは、すてきなロールモデル(パネリストもファシリテーターも含めて)を示してもらいました。またワークショップでは、「キャリアというのは仕事だけでなく人生におけるすべての要素=人生そのもの」という言葉に視野を広げられました。最近年齢にとらわれがちな私にとっては“目からうろこ”の時間になりました。

(編集委員 矢ヶ部ひとみ)

子育てしたい、働きたい気持ちに性別はない

開催日 令和7年2月8日(土)

会場 SAGAアリーナ スイートラウンジ

「羽鳥慎一モーニングショー」などテレビでも活躍されている石山アンジュさんをゲストにお迎えして、「女性の理想の働き方を叶えるすばらしいまちになるために参考にせざるをえないシェアリングエコノミーの7の話」と銘打ったセミナーが開催されました。

シェアリングエコノミーとは、インターネットを介して個人と個人・企業と企業などとの間で活用可能な資産(場所・モノ・スキル等)をシェア(売買・貸借等)することで生まれる新しい経済の形で、「民泊」や「カーシェア」も実はそのひとつです。

01 スペシャルトーク「シェアで手に入れる理想の働き方」

私たちが何気なくやってきたこと、例えば「子育て」では子ども服やおもちゃなどの共有、「老後」ではお買い物の手伝いや、おすそわけなどなど、地域のつながりが薄くなってきた今、「自分の力なんて」と思っていたことが、シェアをすることで地域の支えとなり町の支援にもつながるかもしれない。「大量生産・大量消費」の時代から「豊かさ」の価値観も変化してきており、個人間のつながり、支えあいも大切。参加者に「自分ができることを考えてみよう!」と投げかけられました。参加者もそれぞれに、「私はこれならできるかな〜」とまずはこの場でのつながりを広げようでした。



トークゲスト
 (一社)シェアリングエコノミー協会
 代表理事
 石山アンジュさん

02 トークセッション 石山アンジュさん × 坂井英隆佐賀市長

石山さんも坂井市長もシェアの考え方で地域をさらに良くしていきたいと意気投合。そのためには個人の豊かな生活を実現することが不可欠。坂井市長は「好きなこと」を多忙な毎日の中で生かすためには「仕事とプライベートを切り離さない」といえば、走ることが好きなので市役所まで走っていくことや、世界とつながるイベント「バルーンフェスタ」を盛り上げるために自ら熱気球パイロットの資格取得を目指されているということも話され、参加者を沸かせていました。

また、市長から「仕事と家庭の両立のためには、家事のシェアが大事」との話もありました。



佐賀市長
 坂井 英隆

03 ワークショップ「未来を自由に描く」 キャリアコンサルタントと考える未来

今を「自分の軸」とし、Will (〇年後にどうなっていたいか)、Can (今自分にできること、得意なこと)、Must (何をするか)をつなげて「やりたい自分の姿」を実現するための目標設定に取り組みました。



感想

年齢や職業など様々な方々が参加されていました。お孫さんがいらっしゃる方で「気後れしてしまう」と遠慮がちに言われていた方や「私は人見知りなんです。」という方が、いずれも終盤には生き生きと発言されていて、「つながりの場」を提供することの大切さの一端を再確認できた気がします。午後からはSAGAバルナーズの観戦も用意されていて、参加者は大満足の様子でした。(編集委員 高橋朋子)



日常に潜むジェンダーバイアスに気づくワークショップ

第2回「日常生活で感じるもやもやについてのプチ講義」

- 開催日 令和6年11月30日(土)
- 会場 神野公民館
- 主催 Mimosequal(ミモザイコール)

「女性だから…」 「女性なのに…」 と性別を理由に役割を決められたりして、もやもやした経験はありませんか？
こうした身近に潜むジェンダーバイアスに気づき、共有し、考える全4回シリーズの第2回目を取材しました。

もやもやについての話しやすさを重視して参加者は女性のみ限定し、グループに分かれ講義のテーマに沿ってざっくばらんに意見を交換しました。

I. 具体事例を交えたプチ講義と意見交換

講師: Mimosequal代表 古泉 志保さん



01

「セクハラ」が問題だと認識されるまでの長い戦い

1989年、福岡の企業でのセクハラ訴訟をきっかけに、その年の流行語大賞に「セクシャル・ハラスメント」が選ばれ、ようやくセクハラが「問題である」と認識されるようになりました。長い間女性が声を上げ続け、戦ってきたことにより人々の認識が少しずつ変化していきました。

02

結婚したら女性が家事をするのは当たり前？

「家事は女性が無償でするもの」という家事に対する固定的な性別役割分担意識も時代を経て変わってきました。SNSが発達した現代では抗議の声「炎上」として可視化されやすくなりました。

03

さまざまな「ハラスメント」がある

暴力はなくとも、モラハラ、マタハラ、パワハラなど、今では様々なハラスメントや差別に名前がつき、認識されるようになりました。また、ハラスメントに関連して新たな概念も知られるようになりました。

- ・ トーンポリシング (話す内容ではなく口調や論調を非難して論点をずらすこと。)
- ・ マンスプレイング (男性が女性を見下すような態度で説明や解説をすること。)
- ・ マンタラプティング (男性が女性の話を不必要に遮ること。)

このように今までももやもやしていたその現象に名前がつく(名前を知る)ことで経験の再定義がしやすくなり、「ごく普通の人」が抗議の声を上げやすくなってきたという歴史があります。

<参加者の意見や感想>

- ・ 「モラハラ」のように言葉を定義することで、もやもやした気持ちを一言で表せるようになり、味方を得たような気持ちになった。
- ・ 過去に頑張ってくれた女性たちがいて今があるのだと思った。
- ・ ジェンダーに関するもやもやを持っている男性も声を上げてほしい。



Ⅱ.古泉志保さんへインタビュー

プロフィール

Mimosequal (ミモザイコール) 代表。

元青年海外協力隊。その後も海外生活を経験し、現在は佐賀県地域おこし協力隊としてNPO法人地球市民の会にて活動中(取材当時)。自身のテーマであるジェンダー平等と多文化共生を掛け合わせ、より良い社会づくりに励んでいる。

※Mimosa=ミモザ(国際女性デーのシンボルフラワー)とEqual=(ジェンダー平等)を重ねて団体名にしたもの。

暗黙のジェンダーロール(固定的な性別役割)や従来の常識に縛られることなく、女性が自由に活躍・躍進できる社会を目指す団体。



ジェンダーへの問題意識はいつごろから感じていたのですか?

古泉さん:子供のころからです。兄がいるのですが、母が私にだけ食事の準備の手伝いを頼む一方で、兄はテレビを見てくつろいでいるということがありました。「女の子がやるのが当たり前」という意識があったのだと思います。中学生の時に「男尊女卑」という言葉を初めて知り、それまでのもやもやした気持ちはそれだ!と思いました。それから現在までジェンダーのことを考えてきています。大学もジェンダー研究ができる場所を選びました。

Mimosequal(ミモザイコール)を立ち上げたきっかけは?

古泉さん:地域おこし協力隊として活動してきた佐賀で、ジェンダーに関する活動をしていくことで男女ともに意識の変革をしたいと思ったのがきっかけです。女性も諦めている節があるのではないかと。そうではなく、一人ひとりが声を上げていくことで社会を変えることができると伝えていきたいです。また、ジェンダーを学ぶために海外留学した学生メンバーとの出会いがあり、「一緒にやってみよう!」という感じで団体を立ち上げました。

今後の活動の予定は?

古泉さん:今回は女性限定のワークショップにしましたが、ジェンダー問題はみんなに関わることなので、男性や「もやついていない人」も含めてもっと多くの人に広げていきたいですね。

感想

私も参加者の一人として皆さんと意見交換をさせていただきました。「こんな経験あるある!」、「あれもハラスメントかも・・・?」等、自分の中のもやもやを共有できてとても有意義な時間でした。また、講義後に日本のセクハラや女性差別の裁判例を調べてみると、多くの女性が戦ってきた歴史が今に繋がっていることをあらためて知ることができました。

古泉さんがおっしゃったようにジェンダーは皆に共通するテーマなので、男女問わず日常の小さな問題意識に注目することが重要だと思います。(編集委員 草野圭織)

父と子で一緒に楽しむ料理教室



令和6年10月19日(土)

ほほえみ館

“タッキー先生”こと滝村雅晴さんを講師にお招きして「生地から作るピザ」の料理教室が開催されました。“タッキー先生”は、料理は以前から作るだけはしていたが皿洗いや片付けは妻任せにしていたそうで、最後の後片付けまでするのが料理であること、作ったことがない料理はレシピ通りに作り上手くなったことなどを話されました。

“男の料理”とは自分のお腹が減ったから自分の都合で自分の食べたいものを作る趣味の料理のことだが、“パパ料理”とは自分のお腹が減ってなくても、お腹が空いた妻や子どもに気づいて作るお父さんの家庭料理で思いやり料理だそうです。

市内から12組のパパと子どもたちが参加。パパからは「家で料理はしないがピザが好きだから参加した」、「日ごろから料理をしており、お菓子作りも好き」、「子どもと一緒に作るのが楽しみ」などの声を聞くことができ、楽しい雰囲気でもピザづくりが始まりました。

まず先生から包丁の使い方や食材の切り方、ピザ生地やピザソースの作り方の実演、上手にできるポイントの説明があり、各グループで調理開始。お父さんと子どもたちが一緒にピザ3枚分の生地を作り、楽しそうに具をのせて個性豊かな世界に一つしかないクリスピーピザを完成させていました。生地を発酵させる必要がないクリスピーピザはその場で食べられるのが良いですね。



参加者の声

- Aさん** 子どもと一緒に楽しく作る事ができた。子どもと過ごす時間を充実させたい。
- Bさん** 自分は家では料理はしないが初めて子どもたちと料理をすることができて良かった。これを機会に家でも子どもたちと料理を作りたい。

感想

パパ必見の動画はこちら



すべてのグループが楽しそうに親子でピザを作り、時間内にピザ2~3枚を焼き上げました。できたばかりのアツアツのクリスピーピザを試食し、親子で作った味を堪能していたのが印象的で親子の絆も深まったように感じました。筆者も自宅で生地作りからピザづくりに挑戦してみましたが、短時間で調理でき、美味しいと家族に喜んでもらいました。“タッキー先生”のYouTube動画を見て他のレシピにも挑戦してみたいです。

(編集委員 椋島陽一郎)

- 佐賀市男女共同参画推進 - 協賛事業所紹介

市とともに男女共同参画の推進に積極的に取り組んでいただいている事業所を紹介いたします。(五十音順)

佐賀女子短期大学 (本庄)

教育・学習支援業



佐賀女子短期大学は、1966年の開学以来、学園訓「順和・礼譲・敬愛・奉仕」をもとに、佐賀県内外の女子高等教育の発展につとめてまいりました。

多様性を尊重する時代の変化に合わせ、2024年度に共学化、男子学生の受入れを開始したところです。私たちはこれを機に、誰もがいきいきと働くことができる社会の実現に向け、よりいっそう尽力してまいります。

株式会社杉養蜂園

(駅前中央) 食料品製造業



弊社は会員様へ、商品のアフターフォローや健康に関するお悩み・ご要望に寄り添ったご提案をするコールセンター業務を行っております。女性が多く在籍しており、産休・育休を経て子育てをしながら活躍している社員もたくさんいます。長く勤められる企業をめざして福利厚生の実践に取り組んでまいります。

社会福祉法人つぼみ会 特別養護老人ホームつぼみ荘

(北川副) 社会福祉・介護業



当法人は、1987年に「利用者に信頼されるサービスの提供をする。」ことを基本方針として設立され、特別養護老人ホーム、短期入所生活介護、通所介護、訪問介護、居宅介護支援事業を運営しています。

女性職員の割合が多く、産休・育休、介護休暇等の取得を推進し、職員が働きやすい職場環境づくりに取り組んでいます。

ヤマト運輸株式会社 佐賀BPOセンター

(駅前中央)

運輸業



弊センターは、2013年5月に経理・人事のオペレーション業務を中心に処理する部門として佐賀に開所しました。社員数は64名となっており、約50名がパート中心で、女性社員も多く子育て世代の方も活躍できる環境です。また、半休制度や職場ミーティングで社員の声を取入れ、働きやすい職場づくりをしています。



「育児休業支援手当金」が 新たに創設されます!

手取り10割!?

既存の育児休業等給付(賃金の67%)に加え、出生後休業支援給付金(賃金の13%)が上乗せで支給されることにより、賃金の80%が支給されることとなります。賃金の概ね2割は社会保険等で天引きされていることから、**賃金の80%の給付 = 手取り10割相当**となります。

男性も育児休業を取得して、仕事でも家庭でも活躍しましょう。

詳細→
(厚生労働省HP)



男女共同参画推進 協賛事業所 募集中!

事業所での男女共同参画の推進は、子育て環境の整備や仕事と家庭生活の両立支援など、事業所のイメージアップに繋がります。

協賛事業所への登録を
お待ちしております!

詳しくは
佐賀市HPを
ご覧ください

担当：佐賀市 男女共同参画課
電話：0952-40-7014
FAX：0952-29-2095



申込用紙は佐賀市ホームページからダウンロードできます。
<https://www.city.saga.lg.jp/main/439.html>

5 ジェンダー平等を
実現しよう

女性に対する暴力をなくす運動



毎年11月12～25日は「女性に対する暴力をなくす運動」が実施されており、この期間中は各地でさまざまな取り組みが実施されています。シンボルマークであるパープルリボンのバッジやシンボルカラーの紫色にライトアップされた建物などを目にされた方も多いことでしょう。

暴力は、その対象の性別を問わず、決して許されるものではありませんが、女性に対する暴力の根底には女性の人権の軽視があると言われて

います。もし、あなたの知り合いやあなた自身が、暴力の被害に苦しんでいるならためらうことなく相談してください。



相談先一覧▶

見えないところに潜む意識

女性たち自身が基本の“き”として長い間守り続けてきた『男らしさ・女らしさ』という価値観は、払拭されているでしょうか。

ジェンダーに関する活動に積極的に取り組んでいる60代の友人が、息子の妻に対してふと漏らした愚痴。「共働きは二人が選んだことだけど、仕事に疲れた息子が台所で立ち働く姿を見ると複雑な気持ちで…」活動で得た知的理解と家事労働への固定観念からくる感情のせめぎ合い。それは長い時間をかけて意識の中に染み込んだ、心の奥底にある価値観とのずれであり、簡単には解決しないと改めて気づく思いです。

戦前の教育では徹底的に、戦後の教育では徐々に薄らいできたとは言えるものの、「男／女はこうあるべき」という意識が暴力につながる事例は、決して少なくない気がします。

(編集委員 友安賀代子)

編集後記

今回紹介されたセミナーや講座に共通するキーワード「未来の生き方」を描くことについて考えてみました。

今、皆さんは「自分らしさ」を発揮できているでしょうか？ジェンダーやハラスメントなどの壁によりそれを発揮できないことはありませんか？もし、身近な家庭・職場・地域にジェンダーへの思いをつづやいたり相談したりできる場があれば、壁を乗り越えるヒントが見つかるかもしれません。また、周りの人とのつながりや支えで自分らしさに気づくこともあるでしょう。皆さんの生活の中で、これからの「ありたい自分」を思い描くことができれば、きっと「未来の生き方」が実現できることでしょう。今回の内容が、「自分らしさ」を実現する一助になればと思います。(編集委員 中村美枝子)

編集委員

(五十音順)

椋島陽一郎・草野圭織・高橋朋子・
友安賀代子・中村美枝子・矢ヶ部ひとみ

※編集委員は市民の方々にご協力いただいています。

発行・お問い合わせ

佐賀市男女共同参画課

TEL 0952-40-7014

E-mail danjo@city.saga.lg.jp

HP <https://www.city.saga.lg.jp/main/438.html>



過去の「ぼずぼーと」がwebで閲覧できます!